

研修報告書 No 6

大阪市立池田病院 中野信彦

研修施設：四万十市国民健康保険西土佐診療所

私は 2011 年 9 月に四万十市の西土佐診療所で一か月研修医として研修させて頂いた。そこは地域医療というイメージにはぴったりの、都会や総合病院といったものから遠く離れた診療所であった。だが診療所の設備は案外整っていて、エコー、レントゲン、CT などの検査は一通りそろっていた。またリハビリ室、入院病床まであった。

私は研修医として外来の見学・診療、入院患者の担当、時間外患者の対応といった町中の病院と特に変わらないところから、往診・出張診療への参加、ルーチンではないが食事介助、入浴介助、リハビリ等まで様々なところに顔を出させてもらった。

外来でおもったことは、西土佐の住民がまず診察してもらおうところがこの病院しかないため非常に多彩な訴えをしてくるということである。たとえば高血圧でかかっている患者が予約の日に受診した際に、数日前に転倒してからの側腹部痛も訴え実際に肋骨骨折であったというような例があった。こういった訴えにすべて対応しなくてはいけないため外来はかなり時間がかかる。今は消化器内科と循環器内科の先生が一人ずつ常勤でおられるが専門に関係なく外科的な創処置までされておられる。当然、必要がある場合は他院に紹介するのだがそれに関しても線引きが難しいなど感じさせられた。もっとも近い総合病院となると市立宇和島病院になるのだがそれでも車で約 30 分程度かかり、しかも診療所の患者は高齢者が圧倒的に多く自分で車を運転できない人も多いからだ。患者および家族の状態を把握し長期的な視点で最もよい形を選択しなくてはいけない。

また患者の ADL の維持も大変重要で、そういった意味でリハビリにも参加させて頂いた。脳血管障害によりリハビリを受けていた患者では、その患者が外泊中に作業療法士とともに自宅訪問を行い現在の ADL で患者が希望する自宅への退院が可能か、またそうするのであればどういった福祉サービスの介入が必要となってくるかなどの検討を行った(図 1)。

地域の住民を対象とした勉強会にも参加した。私が参加した会の題は「認知症について」というものであった。認知症の症状・予防・認知症の患者との付き合い方などに関してスライドを用いわかりやすく説明するもので公民館のようなところで行われた。集まった住民は 20 人ほどだったろうか。ほかにも糖尿病やアルコールと肝障害などに関して啓蒙活動を定期的に行っているとのことであった。

西土佐診療所には老人ホーム「かわせみ」が隣接しておりそこへのお出張診療にもついていった。基本的には高血圧などでずっと内服している薬の処方が主ではあるが発熱患者の対応、褥瘡の治療などもおこなった。

病棟では脳血管障害、肺炎、肝硬変、眩暈など幅広い分野の患者を受け持った。また数は少ないが介護病床もあるのでその患者さんも二人受け持ちとなった。やはり平均年齢は高く病気の治療そのものよりも今後の ADL や生活スタイルが問題となってくるパターンが多かった。そのため病状にある程度のめどがたつと家族やケアマネージャーの方との早めの相談が必要と

なり、主治医として積極的に関わられたと思う。

今回の研修では地域医療は大部分が高齢者のかかりつけ医としての役割から成っていると思わされた。出張診療で行くところにはすでに限界集落となっているところもあり、そういったところに住む高齢者が今後自宅で生活できなくなったときにどこで受け入れていくのかなど考えねばいけないことは多い。程度の差はあれどこれから日本中で課題となることであろう。一か月間西土佐診療所で研修したことで単に〇〇(病気)の治療といったことだけでなくその後の生活まで関わる医療に携わることができ非常に有意義であった。

(図 1)

